

チューゲンハット邸 1930年 ミース・ファン・デル・ローエ

高質な居住空間の達成

ミースが設計したチューゲンハット邸の完成は、博覧会後壊されたバロセロナのパビリオンの翌年で、こちらは幾多の危機を越え、チェコ第2の都市ブルノに現存する。

敷地は、台地の縁に位置し、南西に緩く下る斜面地。台地上の道路面からつづく下階の屋上に、親と子ども3人の寝室が雁行配置され、離れて運転手室付きガレージが平屋根一枚の下に建つ。雁行で生じる道路側の空間に内部階段を設け、それを囲む乳白ガラスの背後に入口がある。

全体は3層で、下りた1階が居間、食堂等の生活空間、地下階は機械室。平面では各階、東側を家族ゾーン、西側を使用人数を含むサポート・ゾーンに区分している。

明快なゾーン分けや雁行配置と入口、生活空間の一室化にロビー邸を想起するが、居住空間の現代化を大きく推し進めた。モダニズムの造形言語での形成と、機能別の部屋を廃しての1室空間化を徹底したことだ。細い鉄骨柱が約5m間隔で建つ20m×15m、天井高3m強の空間に、居間や食堂、書斎、図書スペースを巧みに布置した。

スペースは三つの要素で規定した。まず垂直要素。黒檀練り付け板で半円形に食卓を囲み、瑪瑙石板で居間スペースと書斎を区分している。食堂、居間スペースは眺望のよい南西側で明るい。書斎は瑪瑙石板の裏側、キャビネットを石板に直角に配置し、カーテンも用意し落ち着いたコーナー。北側の壁は黒檀の書棚で埋め、ここもアルコーブがある。次に床である。全面白色リノリウムだが、居間スペースにはベージュ色、無地で厚手の絨毯を、書斎は豊潤な模様と色彩のペルシャ絨毯を置き敷きして場を定めた。さらに家具調度。各種の椅子、テーブル、ピアノ、キャビネットを慎重に配置し、生活行為を支える。椅子は特製で、ブルノ椅子として現在も製作されている。黒檀の木目や瑪瑙の色調、絨毯の色模様がアクセントと装飾になり、シンプルで潤ある空間に仕立て上げている。

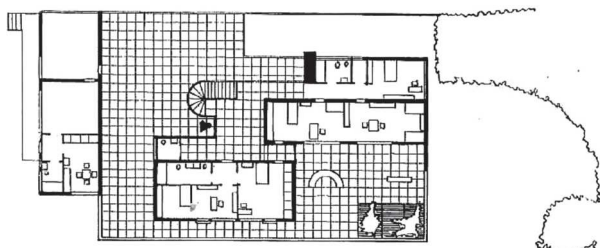
高さ3m強、幅約5mの大きなガラスサッシュ4枚半が連なり、うち2枚は電動で床下へ引き込み開放可能。厨房側は光源内蔵のガラス壁、東側は全面温室だ。新技術を積極的に導入し、精巧で完成度は高く、古びず現代的だ。

世界に普及するCIAM提唱の機能重視の動向に達成可能な質を示し、創意なき陳腐化への批判的範例ともなる。

夫妻はユダヤ人。完成後8年、ナチスから逃れてスイス経由でベネズエラへ亡命し、戻らなかった。邸宅はナチスに占拠されドイツ企業の研究所に、戦後はソ連が使い荒廃した。'55年に国有化して修復。'60年代に文化財に指定され、'92年のチェコとスロバキアの分離独立時には調印式場となり、2001年、世界遺産に登録された。



南西側、庭からの外観



上 2階平面図

下 1階平面図



左上 玄関ホール、右側階段 右上 居間スペース。左側は瑪瑙石板
左下 書斎コーナー 右下 居間スペースから食堂スペース囲いを見る